

## ゼロ弾ひきのゴーシュ

みやざわけんじ  
宮沢賢治

(略)

ゴーシュがうちへ入ってあかりをつけるときっきの黒い包つつみをあけました。それは何でもない。あの夕方のごつごつしたゼロでした。

ゴーシュはそれを床ゆかの上にそっと置くと、いきなり柵たなからコップをとってバケツの水をごくごくのみました。

それから頭を一つふって椅子いすへかけるとまるで虎とらみたいな勢いきおいでひるの譜ふを弾ひきはじめました。譜ふをめくりながら弾ひいては考え考えでは弾ひき一生けん命しまいまで行くとまたはじめからなんべんもなんべんもごうごうごうごう弾ひきつづけました。

夜中もとうにすぎてしまいはもうじぶんが弾ひいているのかもわからないようになって顔もまっ赤になり眼めもまるで血走ってとても物もの凄い顔すこつきになりいまにも倒たおれるかと思うように見えました。

そのとき誰たれかうしろの扉とをとんと叩たたくものがありました。

「ホーシュ君か。」ゴーシュはねぼけたように叫さけびました。ところがすうと扉とを押おしてはいつて来たのはいままで五、六ぺん見たことのある大きな三毛猫みけねこでした。